

Y-1:非営利団体セッション

国立研究開発法人科学技術振興機構

開催日時・会場 9月3日(火曜日) 10:30-12:00 新C103(1階)

JREC-IN PortalでわかるURAの求人求職状況と researchmap、J-GLOBALを用いたURAの業務支援

URAは平成23年度以降、大学等への一定の配置がなされ、その成果についても評価されつつある。しかし、URAそのもののあり方については議論が尽きない。これは、大学の求める人材が必ずしも適切に採用・配置されていないというマッチングの問題や、URAのパフォーマンスに個人差が生じているという問題が議論の根底にあると考えられる。JSTは、ファンディングエージェンシーの顔をもつ一方、実は、研究人材のキャリア支援ポータルサイトの運営の他、科学技術情報流通促進のために、研究開発活動に係る基本的な情報を体系的に収集・整備し提供する事業も行ってきた。そのため、本セッションではJSTの提供する情報サービスにおけるURAの求人・求職状況についての報告や、情報サービスを活用したURA業務支援の提案を行いたい。具体的にはJREC-IN Portal、researchmap、J-GLOBALの3つのサービスを柱にセッションを展開する。

【JREC-IN Portal】研究開発等に特化した求人・求職サイト。文部科学省が実施した調査(平成30年3月)においてJREC-IN Portalを含む既存のマッチングサイトの比較検討が行われた。URA人材採用に係る本サービスの活用状況および、調査結果を踏まえた今後の展望についても報告したい。

【researchmap】登録者数29万人超えの日本の研究者情報を集積するデータベース。研究者の登録した情報を、URAがプレアワード業務、運営支援業務において活用できる便利な利用方法を提案する。また次期researchmapの開発状況、実装予定の機能についても紹介する。

【J-GLOBAL】研究者、文献、特許、研究課題、機関、科学技術用語、化学物質、遺伝子、資料、研究資源の10種類の精度の高い科学技術情報を一度に検索でき、発想を支援する横断検索サービス。こちらは「情報をつないで発想を支援する」というコンセプトを元に設計されているサービスで、プレ/ポストアワード業務を中心に想定した活用方法を紹介する。

幅広いURA業務の中で少しでも課題解決のヒントとなるようなセッションを目指す。

オーガナイザー

高橋 奈々子：国立研究開発法人科学技術振興機構
情報企画部企画管理グループ 主査



民間企業を経て、平成26年4月に科学技術振興機構に入社。人財部にて契約職員の人事業務に従事。平成30年7月より現職。JSTの提供する情報サービスの広報を担当している。

司会者

水野 充: 国立研究開発法人科学技術振興機構 情報企画部 部長



昭和59年日本科学技術情報センター入社。各種データベースの開発運用、ファンディング事業の運営に従事した。平成27年11月より金沢大学にてURA業務に従事したことをきっかけに、平成29年4月よりRA協議会事務局長、同年10月よりWPIナノ生命科学研究所事務部門長補佐を歴任し、平成31年4月より現職。

講演者

米陀 正英: 国立研究開発法人科学技術振興機構 情報基盤事業部人材情報グループ 主査



民間企業を経て、平成26年4月に科学技術振興機構に入社。データ分析、ファンディング情報管理システム構築、知財権利化支援等の業務を経て、平成29年10月より現職。JREC-IN Portalの企画・運営に従事している。

粕谷 直: 国立研究開発法人科学技術振興機構 情報基盤事業部人材情報グループ 係員



学生時代は生物資源学、統計学を専攻し、資源量推定や環境変動耐性に関する研究で修士号を取得したのち、平成30年4月に科学技術振興機構に入社。入社以来、researchmapの企画・運営に従事している。

川村 優実: 国立研究開発法人科学技術振興機構 情報企画部知識インフラグループ 係員



学生時代は工業化学を専攻し、電気化学検出用の新規電極材料に関する研究で修士号を取得したのち、平成30年4月に科学技術振興機構に入社。入社以来、J-GLOBALの企画・運営に従事している。J-GLOBALのサイトリニューアルなどを手がけた。

Y-2:非営利団体セッション

EURAXESS

開催日時・会場 9月3日(火曜日) 10:30-12:00 新C403(4階)

ホライズン2020プログラムを用いた 日欧共同研究プロジェクト: ケーススタディー

所属研究機関の国際プロフィールを上げるため、URAには何が出来るか? 国際共同研究や研究者交流の可能性を最大に広げるための知識が必要と思われます。又、その知識や常識をうまく研究者や学生に伝えることも大事だと思われます。過去の大会でのセッションの経験を振り替えて、今回のセッションは実際のプロジェクトに参加した日本の研究者の経験フィードバックを提供します:

・国際博士課程プログラムMSCA・ITNプロジェクトGEM-STONES(早稲田大学)・国際研究者交流プログラムMSCA・RISEプロジェクトJENNIFER&JENNIFER2(高エネルギー加速器研究機構)・国際共同研究プログラムH2020プロジェクトVISION(東京大学)

オーガナイザー

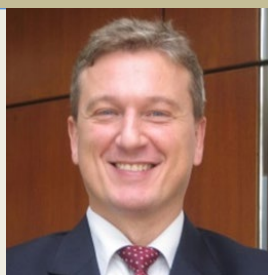
Matthieu PY: EURAXESS Japan Coordinator



08年仏ENSPG(現PHELMA)と京大で材料工学修士。11年仏原子力庁・電子情報技術研究所で博士取得。京大でポスドク後、在日仏大使館科学技術部、14年から欧州委員会プロジェクトEURAXESSの日本室長(coordinator)、18年から日本&韓国室長。

講演者

Gediminas Ramanauskas: Delegation of the EU to Japan Head & First Counsellor, Science, Innovation, Digital, and Other EU Policies Section



リトアニア出身。2007年に欧州委員会でのキャリアがスタート。2007年から2009年まで、事務総局の業務改革推進を担当する部署に勤務。2009年、環境総局に移り、「気候変動」分野での国際交渉を担い、EUの行動を監視する部署に所属。2012年、研究・イノベーション総局国際協力局にて、イスラエル・東方パートナー諸国・黒海地域・アフリカ・ロシア・中央および南アジア地域との科学技術協力分野における、EU政策の策定・実施・監視を担う仕事に携わる。2018年9月より現職。

講演者

**Tom Kuczynski: Delegation of the EU to Japan
S&T Advisor,
Science, Innovation, Digital, and Other EU Policies Section**



ポーランド出身。経済学博士(広島修道大学)。2006年より2012年まで在日ポーランド大使館一等書記官として科学、工学、イノベーション、エネルギー、気候変動問題を担当。2012年から駐日EU代表部にて科学技術部のアドバイザーとして日EU間での連携研究を担当している。

**鈴木真二: 東京大学
未来ビジョン研究センター 特任教授**



1979年、東京大学修士課程修了後、(株)豊田中央研究所を経て、1986年に工学博士取得後、東京大学助教授。1996年より工学系研究科航空宇宙工学専攻教授となり、2019年同職を定年退職後、東京大学未来ビジョン研究センター特任教授。専門は、航空工学。現在、ICAS(国際航空科学連盟)会長。

**宇野 彰二: 高エネルギー加速器研究機構
素粒子原子核研究所 副所長・教授**



大学院時代からつくば市にある高エネルギー加速器研究機構に設置されている大型の電子・陽電子衝突型加速器を用いて物質の究極の構成要素である素粒子を実験的に解明する研究を行ってきた。特に、物質と反物質とで違う物理現象を見つけ出すことによって、素粒子物理学の標準理論を超える理論の構築に向けてのヒントを得ようとしている。また、実験に用いられるガス放射線検出器の専門家でもある。

**山田 尚道: 日欧産業協力センター
Horizon2020 ナショナルコンタクトポイント
室長**



1978年慶應義塾大学工学部卒業。精密機器メーカーに勤務し欧州を中心に海外事業に従事。2016年より日欧産業協力センターの科学・技術・イノベーションマネージャーに就任。あわせて、ホライズン2020の日本におけるナショナルコンタクトポイントに任命され、大学、国立研究所、及び企業の研究者達の欧州との科学技術分野における共同研究の橋渡し業務に従事。

助成財団センター

開催日時・会場 9月3日(火曜日) 13:20 - 14:50 新C403(4階)

民間助成金の獲得に向けて —助成金 応募に際しての留意点など

民間助成財団による助成金は、現在、全体としておよそ1000億円強と見込まれている(助成財団センター 2018年調査による)。これらの助成金は、科学研究費補助金(科研費)をはじめとする国の競争的資金とは異なり、「民間」ゆえの独自で多様な性格を有している。一方、近年、全国の大学や研究機関においては、「外部資金」への依存度を高めつつある。民間助成財団の助成金もそのような資金の一つであろうが、国の競争的資金とは異なり、「民間」ゆえの独自で多様な性格を有している。そこで、当日のセッションでは、大学や研究機関等において研究推進/支援等の業務に携わっているRA関係者を対象に、民間助成金の獲得に向けた必要な知識と情報を提供することを目的に、主として(1)日本の民間助成財団の現状、(2)民間助成財団における助成事業の概要、(3)助成金の応募に当たって、(4)助成の選考について、(5)研究支援・推進担当者として留意すべきこと、等からなるレクチャーを<RA協議会>との共催で行う。

オーガナイザー/講演者

渡辺 元:公益財団法人 助成財団センター
事務局長/プログラム・ディレクター

トヨタ財団のプログラム・オフィサーとして、研究および市民活動等に関する助成事業の開発・運営に長年携わり、その後はプログラム部長・事務局次長。この間、都留文科大学非常勤講師、立教大学大学院特任教授を務めたほか、NPO法人市民社会創造ファンドの立ち上げにも携わり、現在、副理事長。2013年1月より(公財)助成財団センタープログラム・ディレクター、16年4月より事務局長を兼任。19年6月より理事・事務局長。14年4月より立教大学大学院客員教授も併任。

Z-1: ランチョンセミナー

カクタス・コミュニケーションズ株式会社

開催日時・会場 9月3日(火曜日) 12:10-13:10 B201(2階)

英国で導入された「インパクト評価 (Impact Assessment)」の動向から学ぶ新しい研究評価と広報戦略への示唆

研究の学術的評価にとどまらず、社会的インパクトを大学評価に取り入れる動きが起きています。日本と同様に国費による大学への研究助成が大部分を占めている英国では、世界に先立って2014年に社会への還元を意識した「インパクト評価」を盛り込んだ研究評価枠組み (Research Excellence Framework 2014) が導入されました。この動きはアジア地域にも影響を与え、オーストラリアや香港でも同様の「インパクト評価」が始まっています。日本でも科学技術政策の現場で議論されはじめており、将来的に何らかの形で「社会的インパクト」という評価軸が日本の研究評価・大学評価に組み込まれてくる可能性があります。英国における「インパクト評価」では、大学が7年に一度提出するインパクト・ケーススタディの量と質の評価が大学への予算配分に影響を与えます。本セミナーでは英国の複数大学のインパクト担当者に実際にインタビューを行った結果をもとに、インパクト評価はどのような経緯で導入され、各大学が導入に際しどう対応しどのような評価を受けたのか、具体的な事例を紹介しながら、日本にも導入されたら何が起きるのかを想定しつつ、インパクト評価の考え方を説明していきます。後半では研究の社会的インパクト拡大にも関連が深く、現在の日本の大学の国際的なブランド力向上に役立つ最新の研究コミュニケーションの世界的なトレンドとベストプラクティスを紹介しながら、日本の大学が今後取り入れるべき研究広報のアイデアを議論していきます。インパクト評価や研究広報についてよく知らない方にもわかりやすい内容です。ぜひご参加ください。

オーガナイザー

カクタス・コミュニケーションズ株式会社



カクタス・コミュニケーションズ株式会社は、学術コミュニケーションサービスを提供するリーディングカンパニー、カクタス・グループの日本法人です。カクタス・グループは2002年の創業以来、世界173カ国、20万人以上の研究者をはじめとする著者にサービスを提供してきました。個人の研究者をはじめ、大学・研究機関、学協会・ジャーナル、製薬企業の国際化およびブランディングのために、英語・日本語両言語に対応した英文校正、学術翻訳、メディカル・コミュニケーション、学術PRコンサルティングおよび海外プロモーションサポートをご提案いたします。

講演者

湯浅 誠： カクタス・コミュニケーションズ株式会社
代表取締役



大学を卒業後に渡英後、インド・ムンバイが本社のCactus Communicationsに就業。日本法人の設立に携わり、現在カクタス・コミュニケーションズ株式会社の代表取締役を務める。大学・研究機関、学協会など日本のアカデミアに国際化支援事業に長く携わっており、現在はカクタス・グループにおいて日本・韓国・中国・アメリカ・イギリス・インド・シンガポールの全拠点におけるグローバル・ブランド戦略を統括。

Harini Calamur : Cactus Communications Pvt. Ltd.
Content Director,
Research Communication Services



Harini Calamur works at the intersection of digital content, technology, and audiences. She is a content professional with 20+ years of experience in devising content solutions in various formats, that use the most appropriate technology mix, to deliver entertainment, education, and news to diverse audiences. She has devised business strategies, and led content initiatives that excite audience interest, spark conversations, enable collaboration and alliances, and deliver growth on all parameters. She has worked across media, forms, and formats. She is a columnist, and visiting faculty at leading management and communication institutes.

Z-2: ランチョンセミナー

エダンググループ ジャパン株式会社

開催日時・会場 9月3日(火曜日) 12:10 - 13:10 B101(1階)

ワンランク上の大学研究力を目指すために、いま必要なもの

～研究者主体のトレーニングが変えていく、研究者とURA～

大学の研究力強化を目指し、日々邁進されているURAの方々から、下記のような課題をお聞きすることがあります。

- ・ 研究プロジェクト企画立案支援をもっと効率よく提供する方法はないか？
- ・ 研究成果(論文)の質と量をもっと上げていくにはどうしたらいいか。
- ・ 研究者のレベルアップのため、年に数回のセミナーを実施しているが、効果や進捗を把握しにくい。また、多数が同時に参加するセミナー形式には、受講レベルや、参加者限定といった課題も感じる。
- ・ 若手研究者への指導と教育は、中堅・シニア教員の負担になっているのではないか。
- ・ シニア研究者にも、必要な情報を適時的確に提供するために、URAとして何ができるだろうか。
- ・ ハゲタカ・ジャーナルへ投稿するなど、正当に評価されない環境に陥らないためにはどうしたらよいただろうか？

エダングは、大学に求められる国際化や、Vitae/Euraxessなどがデザインするキャリア・ディベロップメントを念頭に、大学の研究力を長期的視点からみたレベルアップの方法としての「研究者主体トレーニング」とその意義を提唱し、また皆様とともに考えてまいりたく存じます。

オーガナイザー



山崎 猛 エダンググループ ジャパン 株式会社
コマーシャル・チーム
コマーシャル・シニア・マネージャー

学術出版社にて約12年間、世界的なジャーナルおよび電子書籍の営業およびマーケティングを経験後、2019年よりエダングに入社。幅広い研究分野をカバーする専門家(エキスパート)を有する弊社が、研究者へ提供できる、さらなるサポートの拡充を追求する。

講演者



Scott McCleary (スコット マクリアリ)
エダンググループ ジャパン 株式会社
エデュケーション・チーム
インストラクショナル・デザイン・マネージャー

2003年より、インストラクショナル・デザイン(教育設計)およびeラーニングに従事し、トレーナーおよび教育コース開発者として、ベネッセ、ソニー、東芝、外務省、防衛省、他40以上の機関と関わる。一方、アカデミックおよびビジネス英語の教育者としての顔も持ち2007年から嘉悦大学で教鞭をとる他、学習院大学、ベルリン経済法科大学の教育コースをデザインを担当する。2018年にエダングに入社し、現在に至る。

Z-3: 賛助会員セッション

クラリベイト・アナリティクス・ジャパン株式会社

開催日時・会場 9月3日(火曜日) 15:50-17:20 B201(2階)

「科学立国の危機 失速する日本の研究力」に基づく データ分析のあり方

科学技術政策および大学・研究機関運営においては戦略的な意思決定やそれに向けたエビデンスの活用が重視されており、論文データはエビデンスとして最も広く利用されています。一方で、論文データは分析の前提条件や分析の切り口等によって解釈が大きく異なる事があり、論文データの過度な単純化やミスリードの可能性も指摘されています。論文分析や論文指標とどのように付き合うべきか？ランキング、政府による評価指標、自機関の成果モニタリング、資源配分などの目的や用途に応じて、どのような分析をすればより正しく公正な示唆を得られるのか？など、論文データ分析にまつわる課題はつきません。経営層や政策立案者への情報発信のあり方も重要な視点のひとつとなるでしょう。

本セッションでは、2019年2月に「科学立国の危機 失速する日本の研究力」を上梓された元三重大学学長、現鈴鹿医療科学大学学長の豊田 長康先生をお招きし、データ分析のあり方、そして様々な切り口の分析から“日本の研究力の今”を、指標の意味や根拠と共にご説明いただきます。特に論文の量・質の両面に大きく関係するFTE(Full-time equivalent研究従事者数)や人口あたりの論文数による分析からは、日本の論文数が世界諸国に比べて大きく低迷している現状とその理由が読み解かれます。さらに先生ご自身の分析を総括した科学技術立国再生のための設計図についてもご紹介いただきます。

オーガナイザー



中村 優文:クラリベイト・アナリティクス
Web of Science事業部 部長

講演者



豊田 長康: 鈴鹿医療科学大学 学長

1950年、三重県亀山市生まれ 1976年、大阪大学医学部卒 1978年、三重大学産科婦人科助手 1984-86年、米国バンダービルト大学医学部分子生理学研究員 1989年、三重大学医学部産科婦人科講師 1991年、同教授 2004年、三重大学学長 2009年、鈴鹿医療科学大学副学長 2010年、(独)国立大学財務・経営センター理事長 2013年、鈴鹿医療科学大学学長、現在に至る。

Z-4: 賛助会員セッション

エルゼビア・ジャパン株式会社

開催日時・会場 9月4日（水曜日） 9:00 - 10:30 B201（2階）

URAに求められるデータリテラシーとは ～ 分析を次のアクションに繋げるために ～

大学に対してEBPM (Evidence Based Policy Making) が求められる中、大量のデータを研究の企画や戦略立案に活用している事例が増え始めています。例えば、科学論文のデータ分析結果を業績評価や国際連携・産学連携に活用している大学や企業は急速に増加しています。一方で、組織内に十分なデータリテラシーを持つ教職員がいないことにより、データを非効率な方法で分析している事例や、分析結果をアクションに繋がられていない事例も存在しています。本セッションでは、このような背景を踏まえて、これからのEBPM時代においてURAに求められるデータリテラシーについて、科学論文データの分析プロセスにおける事例を紹介いたします。研究の企画や戦略立案に関する方の幅広い参加をお待ちしています。

【予定している内容】

1. なぜデータリテラシーが必要か

- データリテラシーが欠けているとどうなるか - 科学論文分析における事例
- 分析指標を誤用している例 - データを使いこなす組織の例

2. データの選定に必要なリテラシー

- データからどのようなアクションができるかを理解する - データの限界を理解する
- 科学論文分析における事例 - 先進技術に関する論文の調査
- 声をかけたい研究者とつながりのある教員の調査

3. データの評価に必要なリテラシー

- データを作成するプロセスを理解する - データの精度を理解する
- 科学論文分析における事例 - 論文の学術分野を分類する方法
- 大学ランキングの要因の分析

4. データの予測に必要なリテラシー

- データの経年的な変化をモニタリングする - データ同士にある相関関係を理解する
- 科学論文分析における事例 - 研究助成金の予測 - 萌芽的な研究テーマの予測

5. データリテラシーを高めるために

- データの活用による業務効率化を考える - データ分析ツールを活用する - データ分析の勉強会を開催する

オーガナイザー/ 講演者



佐藤 遼: エルゼビア・ジャパン株式会社
リサーチ・インテリジェンス部門
ソリューションコンサルタント



大学や企業の研究企画や経営課題の解決を目的とした科学論文分析サービス、分析ツール講習会、論文執筆セミナーなど担当。主な担当製品は、世界最大級の抄録・引用文献データベースScopus(スコープス)、研究力分析ツールSciVal(サイバル)、研究者プロファイリングツールPure(ピュア)など。

Z-5: ランチョンセミナー

シュプリンガー・ネイチャー

開催日時・会場 9月4日(水曜日) 12:20-13:20 B101(1階)

共同研究における 効果的なコラボレーションスキルの習得と支援

データ量の増加に伴い科学における計算機的手法の比重が高まり、研究者には、異なる分野・専門の研究者と協力して複雑な科学的問題に答え、社会や環境における大きな課題を解決することが求められています。コラボレーションの成功には、ビッグデータ・マネジメント、タイムマネジメント、プロジェクトマネジメント、文化や学問的領域の違いを超えたコミュニケーション、利害関係者の管理といった複雑かつ多くのスキルと、さまざまな規制に関する明確な理解が必要です。そのため、協力関係を形成して培い、問題を予測し、データの収集を構造化し、その公開を確実にするためにはどうしたらよいかを理解し、必要なスキルを身に付けるための効果的なトレーニングが、ますます重要になっています。こういった背景から、Nature Masterclassesは今年9月に「Effective Collaboration in Research」のモジュールを発表する予定です。今回のセッションでは一般公開に先立って、新モジュールの解説とコースの紹介、開発に至った背景と調査についてご説明します。

オーガナイザー

守随愛子: シュプリンガー・ネイチャー
Researcher and Consumer Services Marketing Manager,
Marketing - Technology & Sales Operation

SPRINGER NATURE

講演者

Jeffrey Robens: シュプリングー・ネイチャー Editorial Development Manager, Researcher and Conference Services



ペンシルベニア大学でPhD取得後、シンガポールおよび日本の研究所や大学に勤務。自然科学分野で多数の論文発表と受賞の経験を持つ研究者でもある。学术界での20年にわたる経験を生かし、研究者を対象に論文の質の向上や、研究のインパクトを最大にするノウハウを提供することを目的とした「Nature Research Academies」ワークショップを世界各国で開催している。ネイチャー・リサーチ唯一の日本語刊行物 Nature ダイジェストで連載している。

下山 恵里: シュプリングー・ネイチャー Senior Institutional Partnerships Executive, Institutional Partnerships



2018年Springer Nature入社。アジア太平洋地域Nature Masterclassesのオンライン版専属営業担当を経て、現在は教育機関・行政機関を対象としたサービス全般を担当している。教育や研究の現場で今必要とされているトレーニングの最新トレンドに精通し、また東南アジア地域の大学や研究機関に初めてNature Masterclasses オンライン版を導入した経験を持つ。

Z-6: ランチョンセミナー

株式会社ジー・サーチ

開催日時・会場 9月4日(水曜日) 12:20-13:20 B102(1階)

社会ニーズに応える共同研究者をマッチング！ 産官学連携を加速させる新しい研究者探索システム

産学官連携において、企業と大学研究者とのマッチングには、産学官連携コーディネーターが果たす役割が大きい。しかしながら企業側から見ると共同研究者候補を地方国立大学や私立大学を含めて広く探したいとの思いも強い。一方、大学側も社会ニーズを単一の研究者で満たせるケースは少なく、複数の研究者を組み合わせることが求められることも多い。当社ではかねてより国内最大級の科学技術文献データベースであるJDreamIIIのデータを基に、課題を入力するとその課題を解決しうる共同研究者候補を提示する「研究者探索サービス」の開発を進めており、2019年夏にリリースを予定している。同サービスには、LINC(ライフ インテリジェンス コンソーシアム)での共同研究により開発した「将来有望な若手研究者」を探索する機能の搭載を予定しており、簡単なデモを交えて紹介する。また、その他の研究者支援、産学官連携支援サービスについて、最近の強化点について紹介する。

司会者

加藤 真壽美： 株式会社ジー・サーチ
コンテンツサービス部



オーガナイザー / 講演者

長谷川 均： 株式会社ジー・サーチ
コンテンツサービス部 担当部長

